

古代東アジアの金属製容器 I (中国編)

I はじめに

金属製容器は、日本では6世紀前半の古墳から出土した青銅器（以下、銅器と称す）が嚆矢で、6世紀後半から平安時代にかけては古墳や寺院跡、宮殿、集落跡、祭祀遺跡からの出土品及び寺院などでの伝世品が相当量ある。また、奈良・平安時代の諸寺院の資財帳などには、数多くの銅器や銀器などの金属製容器が記載されている。だが、中・近世になると、密教系の法具を除くと、金属製容器はごくわずかな例しか残っていない。

韓半島では、中国前漢の武帝が設置した四郡の一つ、楽浪郡（前108～313年）の古墓などから出土した金属製容器が古いが、例は多くない。出土例が増加するのは、三国時代の5、6世紀頃からであり、統一新羅（668～918年）・高麗（918～1392年）時代にも墳墓や寺院跡などから相当量出土している。朝鮮時代（1392～1910年）の出土例も多く、韓国では現在も金属製食器を日常的に使用している。

中国では、紀元前千数百年に遡る殷代と次の西・東周時代に、彝器（祭器）や礼器として重厚な銅器が数多く製作された。東周時代後半にあたる戦国期（前5世紀から前221）の晩期から秦（前221～前202）代にかけては、伝統的な銅器がすたれ、かわって日常的な銅器が数多く製作され、漢代（前202～220年）に継承される。三国時代（前220～265年）から隋代（581～618年）にかけて金属製容器の出土例は減少傾向にあるが、唐代（618～907年）には銅器以外にとくに鍍金銀器が盛行し、北宋代（960～1127年）や遼代（916～1125年）にも継承された。明代（1368～1662年）、清代（1616～1911年）にも金属製容器は使用されつづけた。

本研究では、まず、出土例が豊富でしかも墓誌などから年代の明白な古代中国の金属製容器を取り上げ、器種の消長と器形の変遷を追求する。時代は、韓半島や日本との関連を考慮して前漢から五代・十国時代までとする。時代ごとにほぼ供膳具、貯蔵具、煮沸具、雑器の順に記述し、案（食台、お膳）や竈、香爐や燈（燈火器）などにも触れる（金属製品が欠落した場合は陶・瓷器などで補う）。小結として、金属製容器類の組成の変化から、古代中国における食生活等の変化を類推する。

韓半島や日本の金属製容器類は、出土した墳墓に墓誌があるとか、年代がわかる寺院の創立や修造に関わる遺物と判断できる例は少なく、伴出した他の遺物の編年観を斟酌しながら、器種の消長と器形の変化を追求せざるをえない。時代は、韓半島では三国時代から高麗まで、日本では古墳時代から平安時代までとする。取り上げる対象と記述の順は、中国の場合とほぼ同様である。小結として、古代の韓半島と日本それぞれにおいて、金属製容器類の組成の変化から、食生活等の変化を類推する。韓半島の場合だと、中国からの影響、日本の場合だと、中国や韓半島からの影響がどのように及んだかを探る。また、それぞれの国々の独自性も明らかにする。